

自閉症概念と当事者家族の相互作用

—当事者の自伝や日誌を媒介にして—

松山大学大学院 渡邊文春

1 目的

当初の自閉症概念においては、自閉症の原因が聴覚障がいと知的障がいに因るとみなされていたカナータイプだった。それから知的障がいを伴わないアスペルガータイプが加わり、聴覚障がいと知的障がいは分類基準から除かれた。1990年代からアスペルガータイプの当事者たちが自伝を書くようになってからは、自閉症当事者が経験した感覚や行為を外部の人々にも伝えられるようになった。そこで本稿の目的は、自閉症児を持つ家族、とりわけここではカナータイプの当事者の母親が、アスペルガータイプの自閉症当事者が書いた自伝を読むことを通して、母親がどのように我が子が経験した感覚や行為を意味付けているのか、ということ明らかにすることである。そこから、自閉症当事者の家族が抱え込む子育ての困難を、軽減できないかと考えている。

2 方法

本稿では、カナータイプの自閉症当事者をもつ母親の語りから、アスペルガータイプの自閉症当事者の自伝を読むことによって、自伝を読むまでの我が子の自閉症に対する理解と、自伝を読んだ後の理解に変化が生じている事例を分析する。

3 分析結果

カナータイプの当事者の母親 M さんが語るのには、我が子と健常者のモデル像とを比較することで生じる同化主義的な発達遅滞の問題だった。母親 M さんが家族視点による外からの観察では、我が子が経験した感覚や行為を理解することができなかった。けれども母親 M さんが、カナータイプの我が子による新たな言語で綴られた日誌に目を通すことによって、我が子の内面を少しずつ理解できるようになっていることが分かった。さらに母親 M さんは、アスペルガータイプの当事者からの自伝による、強い主張に接することによって、当事者が経験した感覚や行為をさらに理解できるようになるというマトリックスができあがっている。その結果、当事者家族がカナータイプの我が子が経験した感覚や行為を、推察することが可能になったことが分かる。

4 結論

本稿の結論としては、アスペルガータイプの自閉症当事者が経験した感覚や行為を伝えるという実践が、カナータイプの自閉症当事者の家族が理解し得なかった我が子が経験した感覚や行為について、当事者視点の捉え方を提供しているのだった。そこから、家族が抱く自閉症当事者と健常者のモデル像とを比較することで生じる、同化主義的な発達遅滞の問題について、当事者視点で得られる一つの個性として理解することが出来れば、自閉症に対する当事者家族が抱く、子育ての負担の軽減が計れるのではないだろうかと考えられる。